

母子保健対策としての性教育

— 思春期からの性教育の評価と課題 —

森 本 美 佐

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Sex Education as a Promotion of Maternal and Child Health :Evaluation and Issues of Sex Education from Puberty

Misa Morimoto

Naragakuen University Narabunka Women's College

厚生労働省が発表した「健やか親子21」の最終評価では、人工妊娠中絶や性感染症も減少し良い結果を残しつつある。しかし妊娠中の喫煙・飲酒という新たな問題も出てきた。これは、思春期の性に関する問題を、母子保健対策としてとらえ、人間のライフサイクル上の成長発達の課題として考えていく必要があることを示唆している。本研究では、高校までの性教育の実情とその問題を明らかにし、成長発達に応じた性教育の継続について考察した。本学学生を対象にアンケート調査を行った結果、すべての学生が高校卒業までに性教育を受けていたが、有用性は低かった。それに対し、本学で行った性教育については90%以上の学生が良かったと評価し、今回のような性教育の継続も必要と答えていた。早期からの教育だけでなく、思春期・青年期を通して継続的に指導を行うことが重要であり、各時期で押さえる内容や方法の検討が必要である。

キーワード：思春期、青年期、母子保健対策、性教育

1. はじめに

我が国の母子保健は、妊産婦や新生児の死亡率も低く世界最高水準にあるといわれている。しかし、思春期の人工妊娠中絶や性感染症、薬物乱用、不登校などの問題も生じてきた。平成12年に策定された「健やか親子21」¹⁾は、このような課題に対し、21世紀の母子保健の取り組みの方向付けと指標を示したものである。①思春期の保健対策の強化と健康教育の推進、②妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援、③小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備、④子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減といった4つの課題を設定し、それぞれ10年後の目標数値を示しその達成に取り組んできた。

平成25年、10年計画で行われてきた「健やか親子21」の最終評価と次期計画に向けた提言²⁾が出された。最終評価における課題の達成状況は、「改善した」が81%であった。「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」を見てみると、中間報告では、人工妊娠中絶が減少傾向にある一方性感染症は増加していた。最終報告では、両者ともに減少していた。しかし、地域差があるという指摘もあった。喫煙・飲酒率も減少しているが、女子の飲酒率の割合が男子を上回っていることや、思春期の痩せの割合が大幅に増加していることが、新たな取り組みの課題として上がっていた。

同調査の奈良県の思春期の母子保健対策の現状を見てみると、10代の人工妊娠中絶は、人口千に対して全国は8.8であるが、奈良県は4.6と全国の中で一番低かった。性感染症の罹患頻度も男女ともに全国平均よりはるかに低い。喫煙率や飲酒率も減少傾向であるが、女性の喫煙率の減少率は近年鈍化してきている。奈良市³⁾では平成25年度の妊娠中の喫煙率は3.1%で前年度より減少しているが、子どもの4ヶ月健診時の喫煙率は0.8%である。同調査の妊娠中の飲酒率は前年度より増加し1.8%である。これらの現状を受け、奈良県では次代の親育成事業として思春期・青年期教育に取り組み、その一環として大学、高校等にリーフレットが配布された。本学では、リーフレットを配布するだけでなく、看護師で「子どもの保健」を担当する筆者が、母子保健対策の学びにつなげて性教育を実施し、次世代親育成事業の取り組みの一端を担った。

2. 研究目的

奈良県においては、人工妊娠中絶や性感染症も減少し良い結果を残しているが、妊娠中の喫煙・飲酒という新たな問題も出てきた。これは、思春期の性に関する問題を、母子保健対策としてとらえ、人間のライフサイクル上の成長発達の課題として考えていく必要があることを示唆している。では、性教育をどのように捉え、何をどのように行うとよいのであろうか。本研究は、高校までの性教育の実情から問題を明らかにし、今回短期大学部で行った性教育の評価も含めて、成長発達に応じた性教育の継続について考えることを目的とした。

3. 本学で行った性教育について

3.1 ねらい

- ①ライフサイクルに合わせて変化する女性の体と健康課題を知る。
- ②妊娠、出産に伴う女性の体の変化を知る。
- ③安心・安全な妊娠・出産をむかえるために、思春期からの母子保健対策の必要性を知る。

3.2 方法

- ①6～7月のAGH (adviser's group hour) の時間に実施した。

- ②教材は、女の子の体から妊娠までのDVD「ホンネで話そう思春期の生と性」⁴⁾と、奈良県から配布されたリーフレット「今伝えたい!! 将来のあなたへ」である。
- ③単なる性教育ではなく、「子どもの保健」で学んでいる「母子保健対策」として、3つのねらいの説明をした。
- ④まずDVDで安心・安全な妊娠・出産をむかえるために女性として何が大事であるかを視覚に訴え、その後リーフレットをもとに講義で補足した。

4. アンケート調査

4.1 調査方法

調査対象は、今回性教育を受けた本学の学生181名である。内訳は1回生92名、2回生89名であった。性教育の終了後、高校までに受けた性教育についての実態と、性教育についての認識について調査した。自記式質問紙法で、質問内容は、高校までの性教育の実施方法と効果、短期大学部での評価と性教育継続の希望などである。

4.2 倫理的配慮

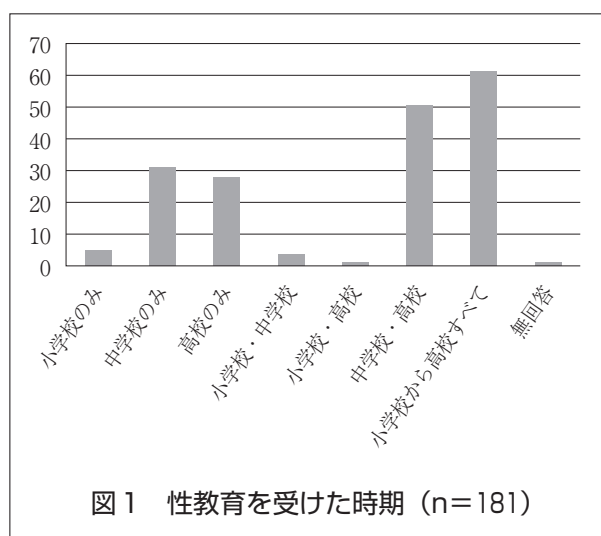
学生には、本調査の目的を説明し、無記名回答であり、回答は自由意思であること、調査結果は奈良県等へ報告をすることなどを口頭で説明し、アンケートの回収を持って、同意を得たものとした。

5. 結果

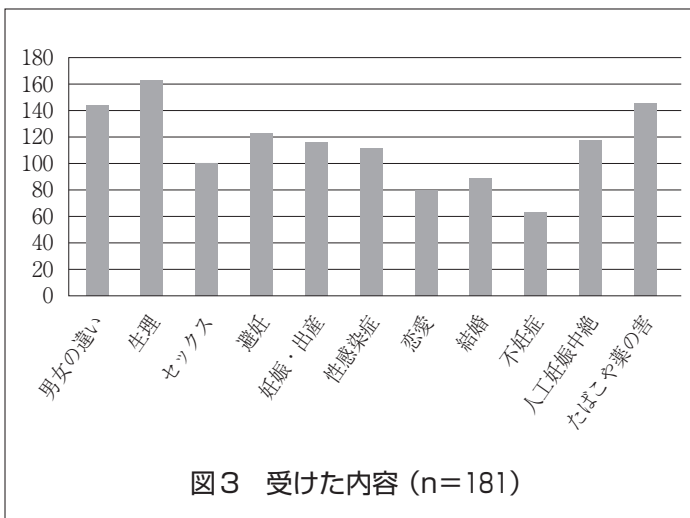
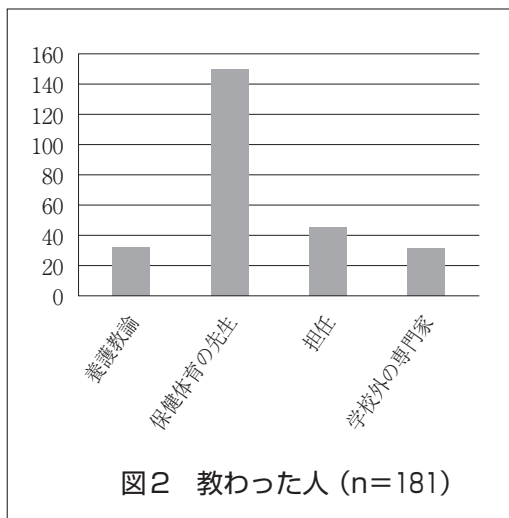
181名全員から回収が得られた。すべての回答に、学年による差はなかった。

5.1 高校までの性教育の実施状況と効果

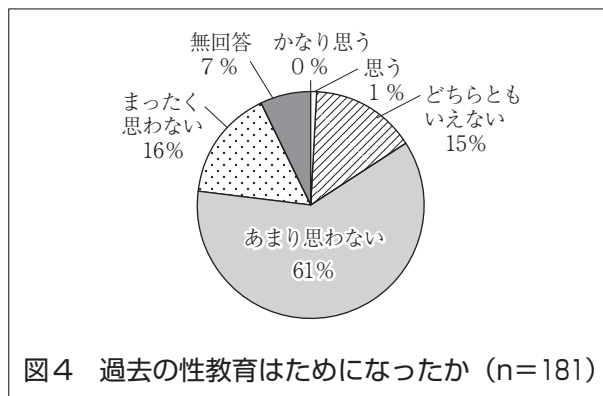
図1は性教育を受けた時期である。無回答1名を除き、すべての学生が小学校から高校までの間に一度は性教育を受けていた。最も多かったのが、「小学校から高校まですべて」で181名中62名(34.3%)であった。担当したものは図2のように「保健体育の先生」が最も多く150名(82.9%)であった。「学校外の助産師・保健師」に教えてもらったというものも30名(16.6%)いた。受講内容については、「生理について」が162名(89.5%)と最も多く、ついで「煙草やアルコール、ドラッ



グが体に与える影響」「男女の体の違い」の順に多かった。半数にも満たなかったのは、「恋愛について」「結婚について」「不妊症について」であった。「避妊」や「性感染症」「人工妊娠中絶」は65%前後のものが受けていた。(図3)

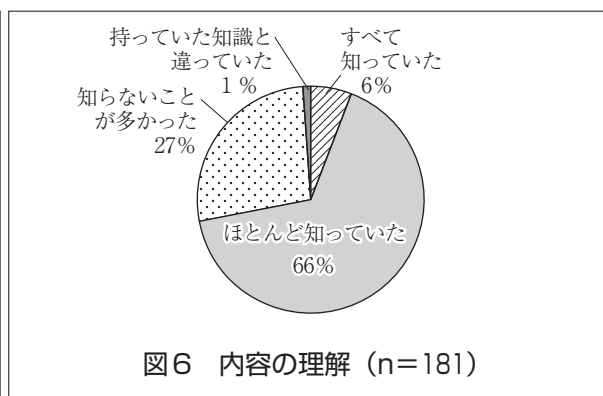
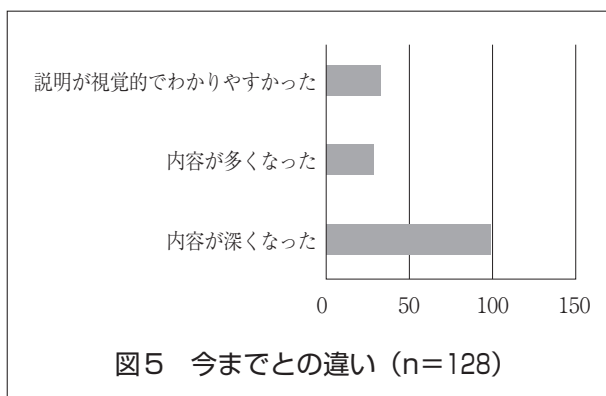


次に、高校時代までの性教育が役立ったかを5段階で質問した。図4のように「あまり思わない」「まったく思わない」を合わせると140名(77.3%)で、その理由は、「あまり覚えていない」「雑誌やネットの方が詳しい」「内容が既に知っていること」などが上げられた。

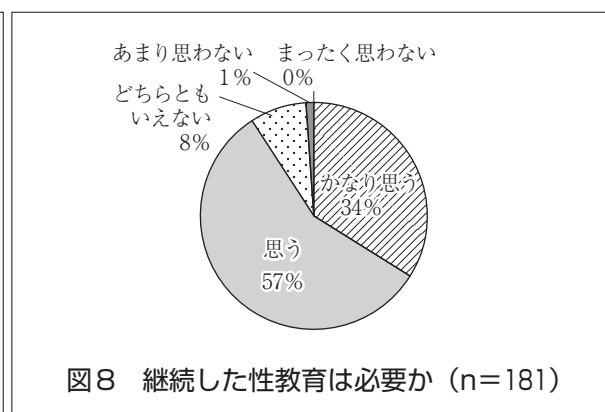
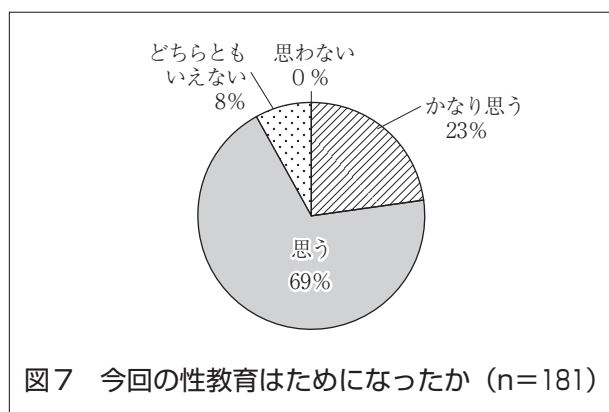


5.2 今回の性教育の認識

高校までの性教育と今回の性教育の違いがあったかという質問に対し、181名中128名が「違っていた」と答えた。どのように違っていたかを尋ねると、図5のように、「1つ1つの内容が深くなった」と答えたものが98名(76.6%)と最も多かった。内容に対しては、70%以上のものが「知っている内容だった」と答えていた(図6)。しかし、「今回の性教育はためになったか」という質問に対し、図7のよ



うに90%以上のものが「かなり思う」「思う」と答えていた。その理由は、「こんなに詳しく知らなかったから」「知識が増えたから」「具体的な避妊方法がわかったから」であった。「今回のような性教育は必要か」という質問に対しても、同様に90%以上のものが「かなり思う」「思う」と答えていた。「思う」と答えた理由は、「性に関して無知は危険だから」「生きていく上で大切だから」「望まない妊娠を避けるため」という意見が多かった。それに対し、「どちらとも言えない」「あまり思わない」理由は、「自分には必要性を感じない」「既に知っていることだから」という意見であった。



印象に残った内容を記入している者は半数にも満たなかったが、「性感染症の怖さ」や「ピルや女性用コンドームなど避妊法」が上がり、他に「女性も性に対して男性任せではなく主導権を握らないといけないこと」という意見もあった。その性感染症や避妊法についての知識を確認したところ、「今回聞いた内容は分かる」としながらも、感染経路などの内容や、避妊方法について具体的に説明できるものは少なかった。

6. 考 察

学生たちは、全員が何らかの形で高校までに性教育を受けてきた。しかし、20%のものが高校時代には受けていない。大学受験等にウエイトが置かれ、「性教育」にあまり積極的ではないのではないだろうか。また、受けていても印象が薄く覚えていないために、約8割のものが有用性を感じていなかった。これは、高校までの性教育の目的がはっきりしておらずルーティン化されている結果であると考えられる。「雑誌やネットの方が詳しい」と答えていたように、生徒が求めている性教育ではなく、その結果、学校での性教育以外からの知識を得ることとなり、誤った知識や過剰な嫌悪感を与えることにもつながる。また、性感染症の怖さや避妊の必要性については学ぶが、具体的な方法までは学んでいない。間違った知識のまま性交を行い、望まない妊娠や中絶に至ることも考えられる。奈良県はこれらが減少傾向にはあるが、0ではなく、また性交経験年齢が低下していることから、早期から性に対する正しい知識を与えるとともに、命の大切さや自分を大切にすることなども指導していく必要がある。性教育を母子保健対策における健康教育と位置づけることにより、性教育の目的や指導すべき内容が明らかとなり、もっと有用性のある性教育が実施できるのではないだろうか。

「たばこやアルコールなどの害」についても、高校までの性教育で話されているが、妊娠中の喫煙・飲酒は全国的に問題になっている。授業でも、「友人は、たばこを吸っていたけれど普通の子どもを産んだ。障害があるケースはまれなのではないか。」と質問があった。「自分たちは大丈夫」という安易な自信があることが分かる。また、若いときからの喫煙・飲酒などの嗜好は習慣化しやすいといわれ、妊娠を契機に一度やめても、何かのきっかけで再開してしまうこともある。奈良県でも、0.8%が出産後も喫煙している。早期から、母性としての体づくりを指導していく必要があると考える。

仁木らの調査⁵⁾では、高校卒業後も性に関する指導や教育を必要と答えたものは半数以下であった。本調査では90%以上のものが必要と答えていた。今回は、具体的な避妊法や性感染症の症状など、映像を通し視覚的に伝えた。内容も、助産師が高校生を対象に、避妊の仕方をモデルを使って実施させていた場面があった。その場面を見ることにより、学生たちにとっては実施体験に近いものを感じ、性の問題を自分の問題として考えやすく、強烈に印象に残ったのではないかと考えられる。AGHという時間制限がある中で、この教材を用いたことの効果はあったと思われる。また、この年代は男女とも約半数が性体験がある⁶⁾と言われている。性体験を通し、新たな性に対する不安や不満が生まれ、より信頼できる知識と方法を身につけたいと思っている学生は多いのではないだろうか。しかし、避妊法や性感染症について印象には残っているものの説明はできないと答えているものが多い。1回みの講義では不十分なことがうかがえる。

朝日新聞⁷⁾によると、NPO法人「ピルコン」は、中絶や性感染症経験のある「先生」が各地の学校で性教育を行っている。その中で「性は日常生活にあるもので、いやらしいものでも恥ずかしいものでもない。隠さず話すことが正しい知識につながる」と述べられている。教える側も教えられる側も、性の問題をごく身近な生活の中にある自分の問題としてとらえ、考えていけるような授業形態、すなわち一方的な講義ではなく、「ピルコン」のように五感に訴え、対話して考えていけるような性教育が今後必要であると思われる。

7. おわりに

思春期からの性教育を健全な母性を育成していく母子保健対策としてとらえていくと、短期大学においても継続教育の必要性が示唆される。今回は、高校までの学びの再確認しかできなかったが、女性としての健康教育という視点で教材の工夫をしたことにより、評価が良かった。しかし、女性としての生き方など内容が多岐にわたるため、今回のような1回の講義ではなく、計画的な性教育が必要であると考える。どの時期にどのように指導していくかは様々な意見がある。しかし、子どもたちが、性に対して興味本位だけで経験しないように、発達段階に応じた指導をしていくことは必要不可欠である。小学校では、思春期の男女の体の違いを知り、男・女としての自己認識を深め、中学・高校では、性のリスクだけを教えるのではなく、生命の誕生の尊さを感じ真剣に性について考え、責任をもった性行動ができる力を育むことが必要である。そして、短期大学では、これから社会の一員として生きていく中で人として欠かすことができない「性」をしっかりとらえ、女性としての生き方を学んでいける健康教育で

あることが望まれる。

引用文献

- 1) 荻野悟郎 (2014) 子どもの保健. P259. 診断と治療社.
- 2) 厚生労働省「健やか親子21」最終評価報告書 (2013) <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000030389.html>.
- 3) 奈良市母子保健計画 平成27年3月 (2015).
- 4) DVD 社団法人日本助産師会 (2009) ホンネで話そう思春期の生と性高校生編. 日本助産師協会出版.
- 5) 仁木雪子 小沢久美子 (2011) 過去に受けた学校性教育の内容と継続のニード (第3報) —大学生対象のアンケート調査から—. 八戸短期大学研究紀要第34巻 : 131-140.
- 6) 日本性教育協会HP 第7回青少年の性行動全国調査 (2011年) <http://www.jase.faje.or.jp/jigyo/youth.html>.
- 7) 貞国聖子「隠さず話すよ性のこと」朝日新聞 朝刊 p27教育 (2015年9月10日)

参考文献

- 1) 齋藤和佳子 芝木美沙子 笹嶋由美 (2009) 大学生の性感染症に対する意識と性教育について. 北海道教育大学紀要教育科学編. 60 (1) : 249-264.
- 2) 岩木宏子 酒井孝子 中尾理恵子 吉谷須磨子 (2000) 短期大学生への性教育の評価. 長崎大学医療技術短期大学部紀要 (13) : 121-125.

